

50周年に寄せて

- 出席者 石川 恵子 (2年生)
宮田 房江 (2年生)
児玉 裕子 (3年生)
高橋 啓二 (3年生)
石井 洋之 (4年生)
今野 由子 (4年生)
塩沢 佳幸 (大学院博士課程前期2年)
市村 孝 (大学院博士課程後期3年)
澤口 孝志 (工業化学科助手)
滝戸 俊夫 (理工学研究所助手)
〔司会〕桜川 昭雄 (工業化学科助手)

司会 今年で、我々の工業化学科は創立50周年を迎えることになりました。そこで学生諸君の率直な意見をお聞きするために、このような座談会を企画しましたので建設的な発言をお願いします。

偏差値の輪切り

司会 まずは、自己紹介代わりに本学科への志望動機とかイメージなどを聞かせてください。

石川 化学を勉強したいとは思っていましたが、特に本学科に進学する意志はありませんでした。合格した大学の中から総合大学である本学を選びました。

高橋 私は付属高校の出身で、高校の授業で化学以外には興味が持てなかったのが、本学科を志望しました。入学前には大学では相当自由な時間があると聞いていましたが、実際には実験などで拘束される時間が思っていたよりも長いので、驚きました。

児玉 私も付属高校の出身なので、初めから本学のいずれかの学部に進学しようと考えていました。本学科以外に進みたい学科がありましたが、成績の関係で本学科に進学することになりました。

石井 大学受験で合格したのが本学科だったということです。私の場合は何かを学びたかったというよりは、4年間の時間が欲しかったため大学

に進学しました。

今野 私は一浪してから、本学科に入学しました。理科が好きだったので理科系の大学に進学しようとは思っていましたが、色々な意味で日大にはあまり良いイメージを抱いていませんでしたので、特に本学科に進学しようとは思っていませんでした。まあ、合格した大学の中で偏差値が一番高かったということと卒業生が多いので就職に有利ではないかと思ったからです。

宮田 将来、技術的な仕事に付きたいと考えて化学科を志望しましたが、特に日大ということでは有りませんでした。入学した時は他の学生の授業に取り組む姿勢に真剣さがなくショックを感じて、あまりヤル気がおこりませんでした。2年生になって先生方の熱意が感じられるようになり、今では本学科に進学して良かったと思うようになりました。

司会 これまでの発言では、積極的に本学科を志望した人があまり居なかったようですが、大学院まで進学した人達は、どうでしょう。

塩沢 付属高校の出身なので、高校の成績で志望学部・学科を決めました。私の場合、最も進みたい学部・学科に進学できたので満足しています。更に卒業研究のテーマに興味を持ち大学院まで進学しましたが、張りのある充実した毎日がすごせています。

市村 高校の先生から進められたのと、化学が苦手だったのでもっと勉強しなければいけないと思い化学科を選びました。又、実験が嫌いだったので好きになるには実験が多いところが良いと考えましたが、実際、本学科は実験が多くレポートに追われて大変でした。大学院へ進んだのは、卒業研究で与えられたテーマを自分の手で完成させたいと思ったからです。研究を通して立派な先生に巡り会えて、本当に良かったと思います。

大学生してますか？

司会 本学科は伝統を誇るわりには、社会からの評価が低いといった話も耳にしますが、先程の発言にもありましたように学生の勉学に対する消極的な姿勢なども、その要因の一つと考えられるでしょうか。

石井 社会では大学のランクみたいなものよりも、

個人の能力で評価されると思うので、そういうことはあまり考えたことがありません。

宮田 建物が古いところに伝統を感じますが、その他はあまりピンと来ません。

澤口 スクールカラーが見え難いと言いますか、早稲田や慶応のスポーツ応援のようにまとまるものが無いのも愛校心や母校に対して誇りを持っていない原因でしょう。

石川 学生に熱意がないからでしょう。先生方は本学科に誇りをお持ちで、夢を持って勉強せよと一生懸命に指導して下さっているように思いますが、学生の姿勢に一般試験を経て入学した人と付属から来た人との間に差が有りすぎます。付属出身の人にはどうにかなるといった感じでのんびりしている人が多く、それらの人を見るとクラス全体が無気力になってしまいます。

児玉 本当に勉強したい事であれば、もっと熱心に勉強すると思います。私は他学部の化学系の学科に進もうとしましたが、同じ化学なら本学科の方が社会的な評価が高いと担任の先生に指導されました。クラスを見てもぬるま湯気分にかけている人が多く、一般、付属を問わず一生懸命勉強している人はほんの一部だと思います。

塩沢 入学した時はヤル気があるんじゃないですか。学生は日大に限らずどこの大学の学生も同じような事をしていると思います。今の大半の授業では、授業に出るより友達と雑談したり遊んでるほうが楽しいのは事実でしょう。ですから先生方にも学生の興味を引くような授業を考えて欲しいものです。

市村 極力、授業に出るように心がけました。親が払っている授業料ももったいないですからね。特に2年生の前期には友達付き合いが良すぎたのか2単位しか取れなくて。それからは友達付き合いを少なくして授業に出るようにしましたが、授業に魅力がなければ出る気がなくなるのも当然で、これと熱意は別問題だと思います。

今野 大学進学の見えかたが根本的に違う人もいます。親は学位出してやらなければ、子供は大学へ進学させてもらって当然と考えていたり、高校卒で社会人になるのがイヤで大学に来ている人だっているはず。勉強しようと思って

来てないのだから授業に出ないのも当然ですし、授業に出なくてサークルの先輩からノートを借りて、傾向と対策を伝授してもらえば大半の科目は単位を取れますよ。それに交友を広げることだって、私は大学進学の一方向の目的であっても良いと思います。

有意義な学生生活のために

司会 授業の外にサークル活動なども大学生活の中で重要な事だと思いますが。

滝戸 僕が学生の頃は研究会というのがあってそこで随分勉強させられました。1年間の成果を学部祭で発表する訳ですが、社会で活躍されている先輩もみえるので、いかげんな事は出来ないって感じで頑張りました。現在のサークル活動や学部祭はどうでしょう。

石井 活発ではありません。閉鎖的で身内だけでやってるような印象をうけます。又、大江戸祭(学部祭)について大学と学生の考え方に大きな差があると思います。

児玉 特に駿河台校舎ではサークル活動する施設がないのも、活発でない原因の一つです。又、大江戸祭に参加するには1年間を通してその組織に加入しなければなりません。この組織というのが何か学部に対抗しているように見え、これを認めないとそのサークルは仲間外れにされます。それに学部のほうでも大江戸祭を積極的に認めていないとか、とにかくあまり派手にやられたら困るじゃないですか。

澤口 最近、偶然に数十年前の学生が編集した、そうですね今でいうなら理工サーキュラーか化工時報のようなものを手にする機会に恵まれました。それを読みますと数十年前と現在とで学生や大学が抱えている問題に際立った差が認められないような気がします。例えば授業に出ないで他のことをしている学生がいるとか、先生には10年1日のごとくの授業は止めてほしいとか。ただ、自治会が組織されていたせいかわりや縦のつながりがしっかりしており、サークルや研究会の活動が活発だったように見受けられます。

塩沢 サークル活動よりも時間があるならアルバイトという学生もいます。経済的にも助かりますし、その人達はアルバイト先で知り合った仲間

との付き合いで、わざわざサークルに入らなくても結構学生生活を満足しているようです。

司 会 サークルとか研究会とは違いますが、本学科には4年次に必修科目として卒業研究が有ります。それぞれの研究室に配属され研究を行う訳ですが、その当たりの感想をお聞きしたいと思います。

石 井 3年生までの学生実験と違って実際の社会で通用する研究ですから、真剣に実験しています。

塩 沢 楽しいけど大変です。ディスカッションを通じて先生の指導は受けますが、学生実験と違って、自分で考えたり文献を調べたりしなければなりません。ただ、初めは無我夢中で実験していて、やっと研究の内容が理解できるようになった頃には卒業ですから残念です。

市 村 そりゃ、学生実験に比べたら楽しいですよ。でも3年生までは朝一番の授業でも9時からですし、実験が長引いたとしてもせいぜい7時位まででしょう。ところが僕の卒業研究では、朝の7時から夜の11時頃まで何日も続くこともあったので大変なのは事実です。ただ、最近の卒研生には、あまり積極的な姿勢が見られませんか。ヤラなくて済めばそれで済ませたいという人が多くなってきました。

今 野 管理が喧しくて、4年生の卒業研究でも自由に行えないのも理由の一つではないでしょうか。友人で国立大学に進学した人の話では、徹夜で実験したり、夕方から出掛けて自由に研究しているそうです。日大では徹夜実験は禁止されているそうで、これらの点で国立大学などとは大きく違います。

滝 戸 徹夜実験が禁止されているのではなく、届け出て許可を得るようになってきました。僕も学生時代には徹夜や休日に出てきて実験をしましたが、最近はそのようなこともなくなりました。

市 村 えっ！許可がいるんですか。僕はつい最近まで、守衛さんに断る位で徹夜や休日に出て来て実験をしてましたよ。

司 会 ところで今の話からしますと仮に図書館や研究室がいつでも利用できるとしたら、学生の勉強心が向上すると思いますか。

全 員 笑いながら「それはないでしょう。」

本当に何とかなるの？就職

司 会 4年生のもう1つの関心事は何といっても就職です。

澤 口 先程の機関紙に卒業生の就職先が掲載されていましたが、それではほとんどが化学系の製造業でした。確かに社会が多様化しており、いろいろな業種で化学の出身者を求人するようになりました。それにしても今は化学系の企業へ就職する人が少ないですね。

今 野 大学の授業や研究室で学んだことよりも、企業の規模とか著名度、給料、勤務地などで就職先を決める傾向があると思います。私の就職先もコンピューター関係の企業で化学とは直結していませんが、女性なので勤務地を優先して決めざるをえませんでした。それに指定校制度を設けて応募できない企業もあるようです。

市 村 日大だからといって初めから相手にしてくれない所はないと思いますから、皆もっと積極的に活動したら良いでしょう。それでもやはり何等かのコネは必要ですね。

児 玉 私もコンピューター関係の企業に就職しようと考えていますが、ある先生から化学は応用範囲が広いというか、まあ、潰しがきくというか、それが化学の良いところだと聞きました。

希望ある将来を築くためには

司 会 今までの話を聞きますと授業、卒業研究、就職がそれぞれ抱えている問題は独立しているのではなく、何か関連があるような気がします。これらを踏まえて本学科の将来につながる意見をお願いします。

石 川 先輩にお願いしたいんですが、どうせ日大だからというのは止めてほしいですね。後輩にすると夢も希望も無くなります。

司 会 どうせ日大だからとは、どういう意味でしょう。

高 橋 自分の逃避場所というか、それで自分を納得させているのでしょうか。寂しい事だと思います。

市 村 先生はノーベル賞でも取るつもりで研究して、学生はノーベル賞でも取れる研究者になるつもりで勉強すれば、どうせ日大だからは無くなりますよ。実際、各先生方の研究は相当なものですし、学会活動でも国立の旧帝大と肩を並べていると言っても過言ではないと思います

宮 田 私は建築科が901教室でやっているような、先生が研究されていることを低学年の学生にも知らせる機会を作ってほしいと思いますね。

滝 戸 学術講演会とか卒論発表会とか、やっていることはやっています。

塩 沢 卒論発表会は時期を考え直してほしいですね。1、2年生は春休み中にわざわざ出て来る気にはなりませんし、3年生は既に入室する研究室が内定していますので、研究室を選ぶ参考に出来ません。

児 玉 一般教養って何ですか。語学なんか勉強するというよりも、翻訳文を暗記した方が試験で良い点数が取れます。専門の先生でも自己満足的な講義は困ります。例えば、難しい式を何本も書いて、学生が理解できているかなんて全く無視して、先に進んでしまう授業もあります。

今 野 試験問題が数年の周期でいつも同じような先生もいます。人間は楽する方に進みますから、これでは積極的に勉強しなくなるのも当然だと思います。

宮 田 基礎的な講義は年輩の偉い先生ではなく、気軽に話し掛けられるような若い先生にお願いしたいですね。年輩の先生ですと分からないことがあっても、何と無く質問がしにくいですから。

高 橋 どの先生がどの科目を担当するかを、単純に専門分野だからという位で決めて欲しくありません。とにかく、理解できるような授業をお願いしたいですね。

石 川 講義中に後ろのほうで、先生の話を聞かずに騒いでいる人達があります。騒いでいる学生が悪いのは当然ですが、先生が何も注意しないのでうるさくて、前のほうに座っていても講義を聞き取れないことがあります。先生も何か対策を考えて欲しいと思います。

市 村 先生方はそれぞれの学会などで活動されていますので、その学会で現在、注目されているトピックス的な要素を授業に盛り込まれたら良いと思います。とやかく言われていますが、相当な部分の学生は化学に何等かの興味が有ったから本学科に進学してきた訳です。大変な御苦労でしょうが、その小さな糸口をきっかけとして情熱溢れた教育をしていただければ、きっと学生だってそれに答えてくれると信じています。

司 会 これからの後輩には夢や希望を与えられるような本学科を作り上げるため、教員は研究・教育に、学生は勉学に頑張っていきたいと思います。話しも尽きないようですが、この辺で座談会を終わらせて頂きます。

(63年1月16日4号館442室編集桜川昭雄)

最近10年間の入試応募者数の推移

年度	理 工 学 部		短 期 大 学 部	
	全科合計	工業化学科	全科合計	応用化学科
54	10708	531	975	147
55	13564	810	1091	181
56	13530	671	913	135
57	13382	808	1252	184
58	15497	1178	1313	224
59	18127	1764	1632	280
60	23176	2134	2233	428
61	24372	2358	2346	423
62	24487	2147	2284	366
63	24262	2474	2687	430

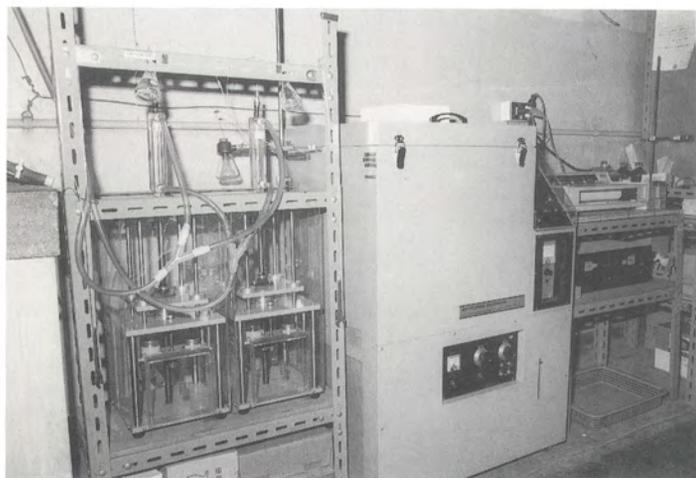
工業化学科 定員 200名

応用化学科 " 100名

工業化学科導入大型機器

工業化学科には教室共通機器として、共同利用されている分析機器及びその他の測定装置が有り、教員や学生の研究活動を支えている。

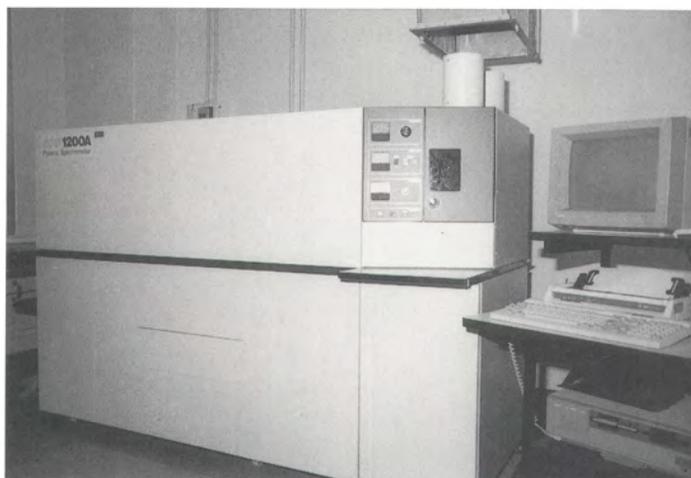
() 内は主管理研究室



溶液エンタルピー測定装置
(化学工学研究室)



蛍光 X 線分析装置
(無機工業化学研究室)

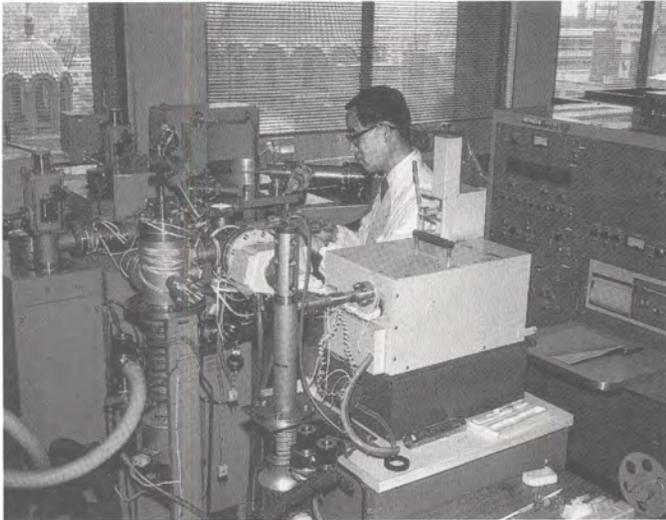


ICP 発光分光分析装置
(分析化学研究室)
セイコー電子 ICP1200



原子吸光分析装置
(分析化学研究室)
日本ジャーレルアッシュ A A 8500

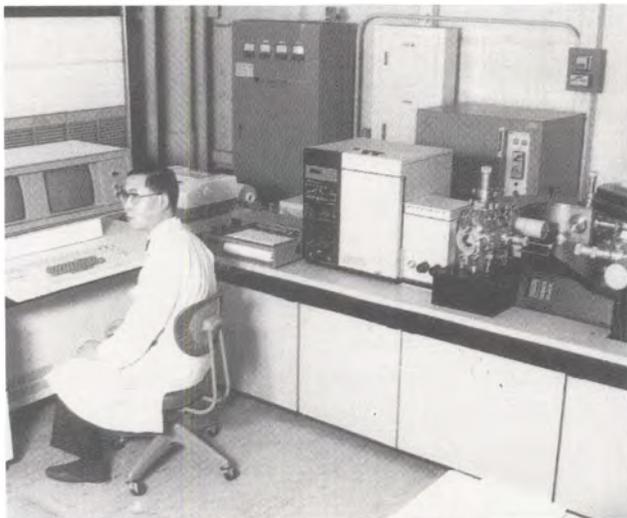
分析センター設備



旧高分解能質量分析装置（昭和48年）

理工学研究所分析センターは、化学物質の機器による分析およびこれに関する教育、研究、試験を行なうため、工業化学・薬学両学科などの要望により、昭和48年に新設された施設である。学内はもとより、学外からの利用も広く受け入れており、教育・研究施設としての役割を十分に果たしている。

開設当初、駿河台9号館に設置された高分解能質量分析装置は、既に現在は旧型より最新型に変えられた。利用度の高いシステムである。

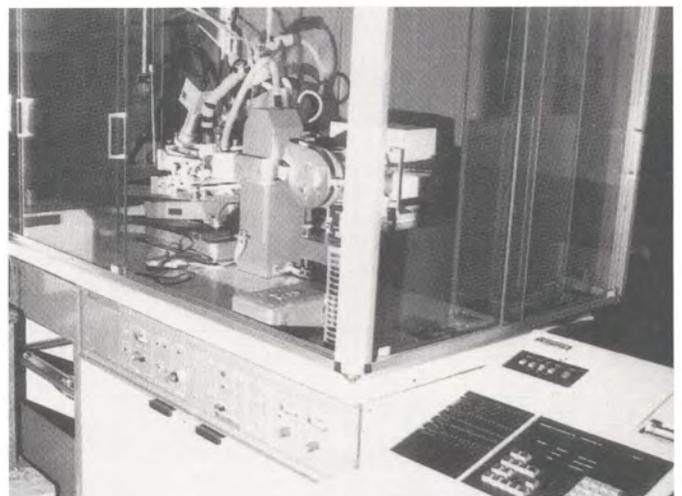


新高分解能質量分析装置（昭和60年）



ガスクロマトグラフ質量分析装置（昭和49年）
マスクロマトグラフ測定装置（昭和54年）

右のX線回析装置は、結晶構造の解析その他にその威力を発揮している。小角散乱の測定にも利用されている。
（2号館内に設置）



超強力X線回析装置（昭和57年）



二波長分光測定装置（昭和55年）

2号館に設置された最新鋭の可視紫外吸収スペクトル測定装置である。差スペクトル、動的スペクトルの高度な測定が可能である。



元素分析装置（昭和60年）

数多くの元素の組成が自動測定できる。
（2号館内に設置）



超電導フーリエ変換磁気共鳴装置（昭和61年）
JNM-GX400

昭和51年に導入されたFT-NMRは、とくに有機化合物の構造解析に威力を十分に発揮してきたが、超電導の利用により、その応用範囲は格段に広がった。多核測定はもちろんのこと、マルチパルスシーケンスによる構造解析は将来ともに魅力的である。



フーリエ変換核磁気共鳴装置（昭和51年）
JNM-FX100

駿河台2・8号館実験 廃水・廃溶剤処理について

歴史的背景

昭和49年公害関連の法律の改正により、大学や研究機関も水質汚濁防止法でいう特定施設をもつ特定事業場に指定され、廃水も厳しく規制されるようになった。

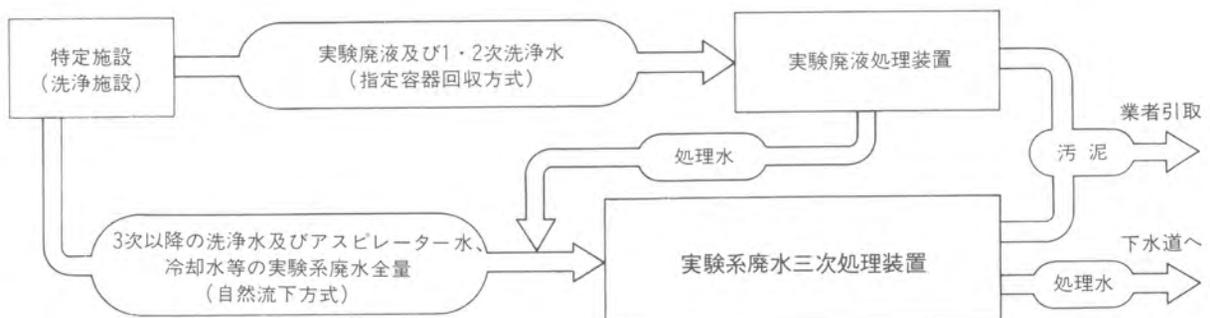
理工学部においては、教育機関であるという責任においても、自ら環境保全に積極的に取り組むべく、直ちに廃水・廃棄物処理委員会が設置された。また同時に工業化学科および薬学科内にそれぞれ排水委員会が設けられ、2・8号館の排水について適切な処理を行う活動が開始された。すなわち、2号館地下西側の狭いドラアイエリアに中和槽が設置され全廃水のPHコントロールが行われるようになった。昭和57年3月に実験廃水から0.005ppm（廃水基準値）以上の水銀が検出されたため、沈澱槽ならびに2・8号館の配管系の徹底的洗浄がおこなわれたが、古い建物であるために配管中に蓄積したと思われる水銀の完全除去は行えず、昭和59年に至りキレート樹脂吸着法による実験系廃水三次処理装置（ユニチカ株式会社製）が設置され、現在に至っている。また、昭和53年より検討を重ねていた実験系濃厚廃液処理装置（三井金属エンジニアリング株式会社製）は昭和55年より稼動し、重金属の原点処理が開始された。実験に伴って排出される有機廃溶媒については専門業者による定期的回収が行われるようになった。



三次処理装置全体図

実験系廃水処理システムの現状と管理運営

昭和59年以来、2・8号館の実験系廃水はすべて三次処理を行ったうえ、下水に放流されており、処理水量は数十～百数十 m^3/day である。処理後の排水中の重金属は定期的に分析されており、殆ど検出されていない。特に水銀は0.001ppm以下であり、当初の目的を果たしている。夏・冬期休暇を除く期間は、工化と薬学の排水委員のメンバーが2～3ヶ月毎に交替で常時運転を行っている。昭和62年度より業者との間に概ね月2回の保守契約が結ばれシステムは順調に稼動している。



■設計条件

処理能力
20 $\text{m}^3/\text{時} \times 15\text{時}/\text{日}$ (最大)

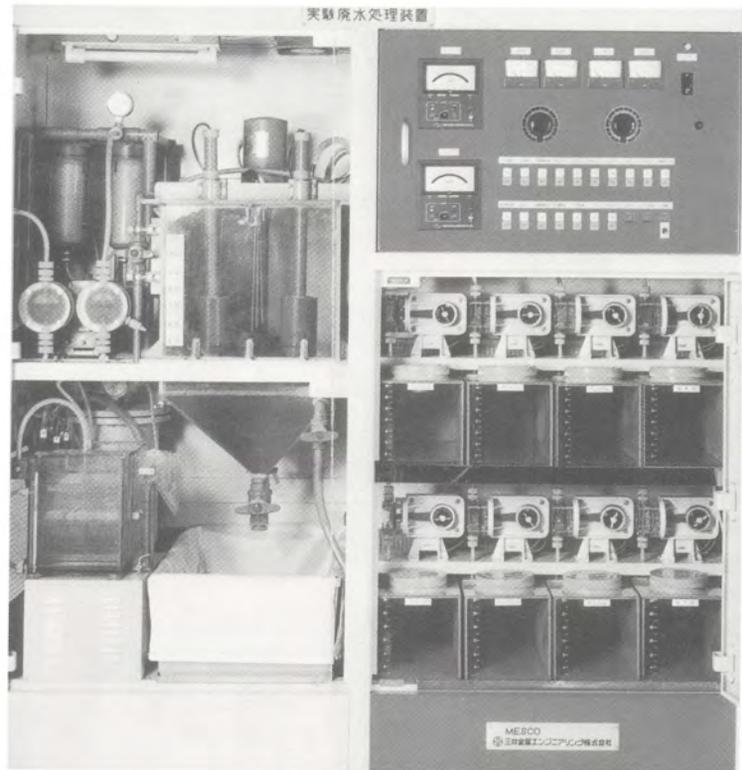
	pH	SS	Hg	Cd	Pd	Cu	Zn	Fe	Mn	Cr ³⁺
受入可能水質	5-9	30>	0.1>	10>	10>	10>	10>	10>	10>	10>
処理水質	5.8-8.6	5 \geq	0.005 \geq	0.1 \geq	0.1 \geq	0.1 \geq	1 \geq	1 \geq	1 \geq	0.1 \geq

単位ppm

実験系濃厚廃液処理装置の概要

装置は廃液貯槽、クロム系還元・シアン系分解中和槽、各種薬剤槽、濾過槽、電解浮上装置、マイクロフィルター、活性炭吸着塔、検水槽などからなり、2号館と8号館の間にコンパクトに設置されている。

処理に適した濃度に調整した廃液は廃液貯槽からポンプで送られ、プログラムタイマーにより自動的に処理される。処理後のスラッジは密閉して保存された後、専門業者によって回収される。



有機廃溶媒処理

昭和53年7月より、すべての学生実験及び卒業研究実験によって生じる廃溶媒は各研究室に設けられている少量危険庫及び校舎外に設置されている屋外危険物屋内貯蔵庫に保管され、前・後期末に業者によって定期的回収が行われるようになった。



工化会50年の歩み

日本大学に工業化学科が設立されたのが、昭和13年4月、その後、年を重ねて本年で創立50周年を迎えることになった。この際、工化会50年の歩みをふりかえてみることは意義があるといえよう。

工業化学科に工化会が生まれたのは、昭和13年の秋のことである。当初は卒業生は未だいなかったため、学生だけの会であり、高等工学校、専門部及び学部（旧制）の各学生が協力しあって、「日大工化会報」を刊行し、昭和18年6月までに11冊を出した。

第二次大戦が始まる前、社会情勢が不安定となり用紙が入手困難となり、刊行を中絶しなくてはならなくなった。本誌（50周年記念誌）編集委員長の伊藤和雄氏（学・昭・20年卒）は、学生時代、昭和18年の会誌の編集委員の一人であり、当時の苦労をよく聞かされる。

「日大工化会報」を開くと、当時工業化学科の科長であった永井彰一郎先生の論文が毎号のように掲載されており、工業化学科の創立者である先生が「日大工化会報」の刊行に大変力を注いでおられたことを伺い知ることができる。「日大工化会報」には、毎号当時の高工、専工、及び学部（旧制）の各学生の数人がそれぞれ論文（文献調査）をのせており、学生の論文といっても大変文章力はしっかりしており、会誌全体としてアカデミックな内容のものである。

第二次大戦を経て昭和20年に終戦を迎えることになる。昭和20年代は毎日の生活が想像を越える程苦労の多かった時代で、この間工化会の復興が度々計画されたが、いろいろな事情にさまたげられ、やっと戦後10年余りの後の昭和33年10月に再建された。再建後の工化会は、再建前の工化会と異なり、旧制（高工、専工、学部）、新制（学部1、2部、短大1、2部）の卒業生と学生及び工業化学科教職員を会員とする組織に変わった。そして、大学紛争の起きる前の年までかなり活発な活動が行われた。主な活動内容としては、会員名簿と工化時報の発行があげられる。

工化会の会員名簿は、工化会が再建された翌年の昭和34年（251頁）、昭和36年（昭和34年の増補110頁）と暫く間を置いて昭和52年（365頁）及び昭和60年（558頁）にそれぞれ刊行された。

昭和34年版の会員名簿の編集にあたっては、クラス別名簿にするのか、職域別名簿にするのか、工化会役員会で意見が別れ、なかなか決まらなかったが、当時の工化会会長の中原先生が「職域別名簿」の発刊に断を下され、最終的に方針が定まったことが強く印象に残っている。「名簿の発行で赤字を出す」のは常識であった時代であるから、工化会の基金が1円もない状態における会長の最終決意はかなりのものであっただろう。編集委員は、学部の2、3、4の各年次の講堂に行き、名簿発刊の必要性について激をとばし、名簿の予約購入を訴えた。そして集まった予約金をとりあえず編集費用にあてた。余り確かな記憶ではないが、各年次の学生数の90%以上が予約に応じてくれて、これが名簿作成の原動力になった。編集作業に率先してアルバイトに参加してくれた学生は、当時のクラスの世話役や勉強に熱心な優秀な方達であり、現在は何れも大変偉くなって社会で活躍されている。コピーの機械もコンピュータも何もなく時代での編集作業は困難を極め、夏休みは完全に返上せざるを得なかったが、誰一人不服をいう人がいなかったのは、今から考えて不思議にさえ思える。当時の学生や教員は、まさに「人生は意気に感じる」といった気がまえが、この難事業をささえてくれたのではなからうか。このようにして発刊された工化会名簿は大変好評であり、基金0であったにも拘わらず、収支は黒字となった。またこの事業の成功は、その後の工化会活動の原動力になったように思う。



その後、大学紛争もあり暫く工化会名簿の発行は中断されたが、工科校友会からの名簿発行のための助成金が工化会が交付され、昭和52年に職域別及びクラス別の内容をもった工化会名簿が発行された。またその8年後の昭和60年にも刊行された。昭和34年版の名簿に掲載された人数は約4,900名であったが、26年後の昭和60年版の掲載数は16,000名を越えており、工業化学科の卒業生数が非常にふえていることがわかる。

工化会再建後に出された「工化時報」は、戦前の「日大工化会報」がアカデミックであったのに比べて内容はすっかり異なり、工化会の予算、決算その他工化会便りが中心でその頁数も大変少ないものであった。いつ頃から発行され、中断されたかについても記録は残っていない。しかし学園紛争のときには中断され、以後昭和58年まで全く刊行されていない。昭和57年頃より工化会役員会で工化時報の発行について論議され始め、予算が認められ、工化時報第1号が刊行されたのが昭和59年3月である。以後昨年までに第4号まで刊行された。新聞形式（2面）のもので、印刷枚数は約5,000前後である。内容は昭和30年代の工化時報より充実しており、工業化学科の研究室紹介、学生の就職状況、学生に対するアンケート調査結果、卒業生に対して依頼した「社会での活躍状況」などが主なものである。工化時報の配布は、学生（大学院、学部、短大）約1,000名と、卒業生には郵送費の節約（1回の郵送費に約60万円必要）のため、各研究室ごとに行なわれる同窓会や研究室から卒業生に対する通信などの機会に便乗して配付されている。

卒業略年表に記した各科を卒業された方達は約1.7万の多数にのぼっている。これらの方々から成る大きな組織である工化会が、工化時報を各人に送り届けることができないのは、工化会に基金が大変不足してい

ることにほかならない。せめて2,000万円位の基金をもつことができればよいのだが、この夢をかなえてほしいものである。

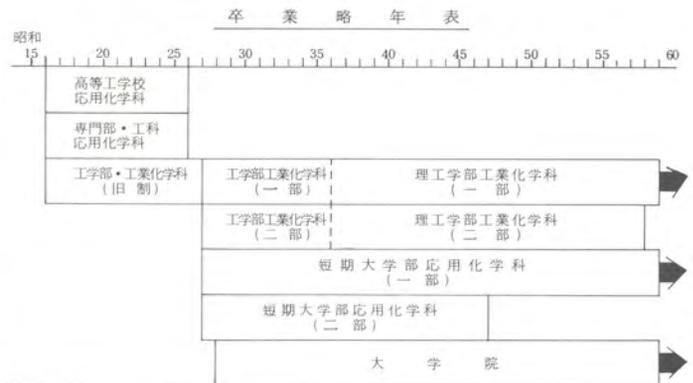
化学を学び、そして駿河台や習志野からの巣立った諸兄弟に願います。機会あるごとに学生時代を憶い起こしなつかしみ、またこれから巣立つ後輩に激励の声をかけて下さることが望ましく、このことが今後の工化会の存在の意義を高め、発展につながると信じている。

諸兄弟の益々のご活躍とご発展を祈る。

（上野敦行記）



工化会総会後の懇親会（昭和63年）



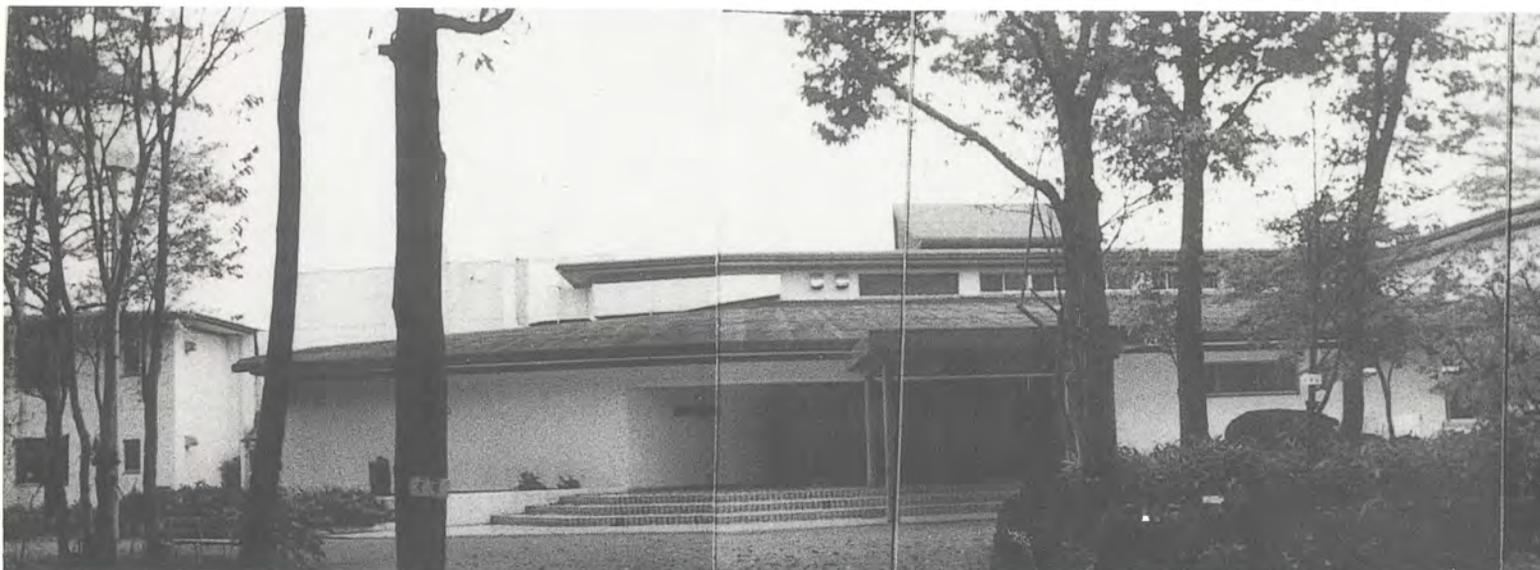
再建された工化会第1回総会（昭和33年）

セミナーハウス・厚生施設

春は野山に！ 夏は海に！ 秋は高原に！ 冬はスキーに！ 夏期・冬期の休暇はもちろんのこと、試験休みなどに豊かな学生生活を営める施設が、本学には山岳・高原・湖畔と、それぞれに設置されています。

21カ所のセミナーハウス及び更生施設は、学生たちがレジャーに利用するだけでなく、教員と学生との親睦交流を深めるゼミナールや課外授業、各種研究会や、夏期講座、運動部や文化サークルの合宿など、自由に、多目的に、年間を通じて利用する施設として、好評を博しています。

軽井沢研修所	長野県北佐久郡軽井沢町
塩原研究所	栃木県那須郡塩原町
葉山寮	神奈川県三浦郡葉山町
伊豆大川セミナーハウス	静岡県賀茂郡東伊豆町大川
山中寮	山梨県南都留郡山中湖村
菅平研修所	長野県小県郡真田町
伊東セミナーハウス	静岡県伊東市松原
清里セミナーハウス	山梨県北巨摩郡高根町清里
館山セミナーハウス	千葉県館山市加賀名
山中月見丘寮	山梨県南都留郡山中湖村
西伊豆セミナーハウス	静岡県賀茂郡西伊豆町
米沢セミナーハウス	山形県米沢市館山字御成山
東磐梯寮	福島県耶麻郡猪苗代町
郡山研修会館	福島県郡山市愛宕町
稲取研修所	静岡県賀茂郡東伊豆町稲取
蓼科セミナーハウス	長野県茅野市北山
横芝セミナーハウス	千葉県山武郡横芝町
水上演習林実習所宿泊施設	群馬県利根郡水上町大穴
下田臨海実験所宿泊施設	静岡県下田市須崎
八雲演習林実習所宿泊施設	北海道山越郡八雲町
岩手実習場宿泊施設	岩手県東磐井郡大東町



軽井沢研修所



新築なった塩原研修所



新築前の塩原研修所（正面）



（箒川対岸より）



葉山寮

中原万次郎先生の 想 出



岩 菅 山 頂



南アルプス



上 高 地

端正なその風貌からは想像し難かったが、中原先生は学生時代からの山男であった。日本山岳会の会員歴も古く、踏破した山頂の数も相当なものだった。学会出張後など機会を捉えては登られていた様子で、親化会研修旅行後に我々も何度か同行の榮に浴したものであった。

長身な先生が坂道も平地も姿勢を崩されること無く、悠々と同じピッチで歩を進められる様子は正に古き良き時代の北欧神山の山行を彷彿させるものがあった。

御定年後は、エベレスト山麓、モンブラン・マッターホルン、キリマンジャロ、マッキンリー、グリーンランドなど5大陸に遠征登山されるなど、足跡をますます広げられ、NHKテレビにも取り上げられた程である。

桜門山岳会の第1回ヒマルチュリ登山や最初のグリーンランド遠征時にも、当初の準備段階で何かと力を貸されていた。工化50周年の今、山を想うとき先生のお姿が重なって思い出されるこの頃である。

(市川次良)



白骨温泉(親化会)



ある卒業生とネパール

教授 松本太郎

今年の正月ネパールに行ってきた。

ロイヤル・ネパール航空をわが国に初めてチャーターした旅行社のツアーである。卒業同期生の中村辰男氏から一緒に行こうと誘われ、また氏が同航空会社日本総代理店のヒマラヤ観光開発株式会社の宮原社長に掛け合って、特別扱いにしてもらった。宮原氏は、信州の出身で中村氏の中学の後輩でもある。日大工業化学科を昭和32年卒業したが、その後また機械工学科二部も卒業している。学生時代から山が好きで、よく山登りをし、谷川岳に新ルートを開拓などもしている。(なお、中村氏は長野ロータリークラブの活動としてネパールの小学校援助計画で昨年10月にネパールに行き、すっかり感激し、また今年5月にはシャクナゲと山を見に行き、数カ月に3回も行く程魅せられている)

卒業後、理研ビニル工業株式会社に、のち千代田化工建設株式会社に就職し、その間、昭和33・34年には南極観測隊、昭和37年にはムクト・ヒマールを登り、昭和40年にはグリーンランド遠征隊を統括するなど、たえず探険への挑戦に夢を託している。山への憧れから昭和41年ネパール政府通商産業省中小企業局にはいり、軽工業の発展に寄与できるものと期待して、ネパールでの小規模の工業についての生産工程や工場建設に関する事業計画、また工場を指導する技術サービスなどをうけもって勤務した。しかし同国は農業労働人口が80%以上という農業国であり、それも生産性低く、山岳地帯多く田畑森林は貧弱で、地下鉱業資源もなく、道路開発もなく、経済的にはインドの影響が甚大で、工業のための立地条件はあまりにも悪い。同国の国家

収入の第一位は観光産業であるほどであり、未開発国からの脱却には観光が大きな役割をもつと考えたのであろう。契約期限を前にして中小企業局を辞め、エベレストの見えるナムチエ・バザール近く3900mの高地にホテル・エベレスト・ビューを建てた。登ったり下ったりの山道200kmをシェルパが何日もかけ資材を担ぎ歩いて運び、想像もできない苦労を重ねて作り上げた。ホテルの下1.5kmのシャンボチュの丘を、分解解体してヘリコプターで運んだブルドーザーで草原にして、小型航空機の滑走路を作りホテルへの便を整えた。以後しばらく順調な活動をしていたが、小型航空機は壊れても補充されていない状態となり、飛行場ルックラから歩けば2日はかかりホテルは目下保守のみで宿泊もできない。

その後やむを得ず、首都カトマンズにホテル・ヒモラヤ・カトマンズの建設をはじめ、昨年立派に出来上がった。

今回我々はこのホテルにお世話になった。カトマンズで王宮、寺院やバザールを見物し、翌日バスで悪路8時間200kmの名勝の地、ボカラへ行く。ここでの朝焼けに立するマチャプチャレに、さらに後日チャーターした小型機から目前に見る悠揚たるエベレストに、美しい容姿のアマダブラムに、白き神々の座の名にふさわしい荘厳なヒマラヤ連山の眺めに接し、大きな感動をおぼえた。

ネパールの数日の旅であったが、深く考えさせられるのは、ネパールはあまりにも貧しいことであり心が暗くなる思いである。GNPは日本の50分の1にも達しないという。しかし物質文明に毒されない温かい素朴な心の人々を見ることができたのは貴重な体験であった。

宮原氏は、今ホテル・エベレスト・ビューの再開に



写真右より 松本, 中原, 宮原

努力している。経営はさぞ大変であろうが、順調な進捗を望みたい。彼の仕事への思慮情熱、豊かな知識、貴重な体験を基に、日本山岳会を通じての人的なつながりや、誠実な人柄から多くの協力者を得、山男の夢を叶え、国情の異なるネパールで活躍している。今後の発展を祈りたい。

なお、著書は彼の事業の哲学やネパールの事情などがよくわかる。

宮原巍著：ヒマラヤの灯：ホテル・エベレスト・ビューを建てる

1982年10月文芸春秋社発行

その他ネパールの写真集を眺めるのも楽しいものである。

ネパール百描（内田良平）：ヒマラヤ・トレッキングイン案内

（中野融著）：もっと知りたいネパール（石井 溥編）

登山家では、宮原氏の先輩そしてマスナル登山隊で著名な松田雄一氏も工業化学科、昭和28年卒業である。



日本学会館



日本学会館は、学校法人の業務を取り扱う法人事務と、法人が設置する学校の業務の中心である大学本部の事務局が配置されている。

その内容の主なものは、国際交流のための研究発表や客員教授による特別講義・国際会議などが開催できる多目的大講堂（500人収容）をはじめ、全学的な研究発表・討論・研修の場としての大中小の会議室があり、なかでも二つの会議室には、同時通訳装置の設備が付いている。

そのほか、資料展示室・コンピュータ室・食堂などが設けられ、各部科校の教育、研究の中核として、有機的な効果を最大限に発揮している。



ラウンジと学祖山田顕義伯の銅像原型、歴代総長などの銅像

工業化学科創立50周年



実行委員長 松本太郎教授



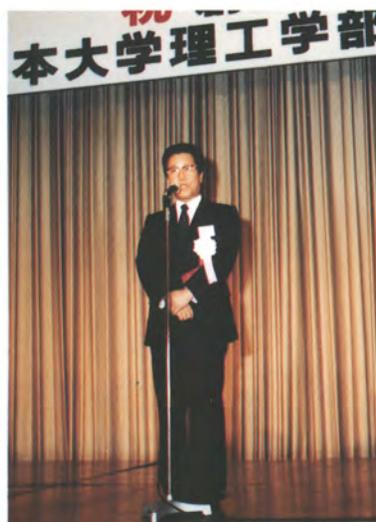
理工学部長 木下茂徳教授



工化会会長 太田善造氏



卒業生代表 曾根 博氏

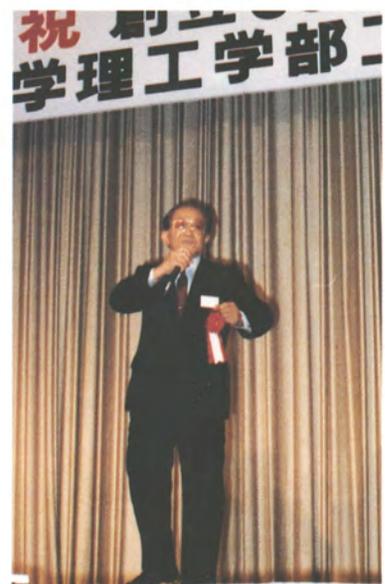


工業化学科主任 和井内徹教授



乾杯 内海 諭教授

記念祝賀会 (昭.63.6.25 京王プラザホテル)



猛ハッスルした
“若きエンジニア”名取 康氏

日本大学理工学部工業化学科
創立五十周年記念祝賀会

次 第

一 開会のことば

司会 真下 清
日本大学助教授
記念会会長
松本 太郎
日本大学教授

一 発起人代表挨拶

工化会会長 工科校友会会長
美濃 薫 兼 社長
太田 善造
工業化学科主任教授
和井内 徹

一 祝 辞

日本大学理工学部長
木下 茂徳
理研ビタミン 社長
曾根 博

一 乾 杯

日本大学教授
内海 諭
スペイン舞踊
石井 智子

一 祝 宴

一 閉会のことば

第3共済ファーマシー社長
名取 康

日本大学理工学部工業化学科
小松氏 康子 スペイン舞踊師



工業化学科創立50周年記念祝賀会が昭和63年6月25日、京王プラザホテル・コンコードボールルームにおいて木下理工学部長をはじめ、多数の来賓、そして北は北海道から南は九州に到る全国各地から参集した500名を越える卒業生の出席のもとに盛大に開催された。会は松本記念会会長の開会の挨拶で始まり、戦中、戦後の時代に学園生活をおくった方々の挨拶や祝辞に

会場は厳粛な空気に包まれた。祝宴に移ってからは同級生同士、先輩、後輩、そして師弟間に楽しい会話が交わされ、ハイライトのスペイン舞踊が始まる頃は会場全体が一体と化した。最後に閉会の挨拶に立った名取氏のリードにより『若きエンジニア』を全員で大合唱した時は各自の胸に熱いものが込み上げてきたのである。





アトラクション
小松原舞踊団





モダンアーティスト平塚良一氏のデザインによるシンボルマークを中心にした50周年記念テレフォンカード



記念祝賀会の会場で平塚氏へ記念品の贈呈



祝賀会受付風景



約500名の参加者に対応するため、応援の女子学生も含め、受付は大わらわ。

祝賀会参加者には、テレフォンカードと式次第が配布された。